

ひばりクリニック実習レポート

自治医科大学 6年 国武聖也

2018年4月5日から13日の期間で実習を行った。本実習以前にクリニックの診療を私は2度ほど見学する機会があった。しかし、どちらも長くて2日間と非常に期間が短く、また、大学2年生で見学を行ったため、印象に残っていない部分も多々ある。今回は、6年生として国家試験程度の知識や経験のある程度得た上での実習であり、期間も7日間と長く充実した実り多い実習となった。

ひばりクリニックに併設されている施設は、日中一時預かりなどを行う事業所である「うりずん」と病児保育を行う「かいつぶり」がある。まず、印象に残るのはクリニックを含めどの施設も明るく、落ち着いて、そして空気が澄んでいるということである。2年前に新築され、木の香りが爽やかで、温かみのある空間である。大きな病院には実現し難いアットホームな環境が整っていた。「うりずん」では重症心身障害児、医療的ケア児の一時預かりや居宅訪問での見守り、利用者の送迎等を実習した。私は、いわゆる重症心身障害児の方とお話する機会はこれまでなかった。今回の実習でコミュニケーションが十分に取れる事がわかり、向き合い方、話し方で小さな仕草や目の動きが十分に理解できることを知ったのは大きな収穫だった。知識や経験の有無で向き合い方が変わるのだなと感じた。これから経験することも積極的に実践し自分の糧にしていこうと思う。「かいつぶり」では、発熱等の発症直後に比べて体力は回復しているものの、保育園には治癒の保証がないため通えないお子さんの保育を経験した。今回は比較的元気であったため対応が容易ではあったが、急性期の場合、非常に慎重な保育が必要になると考える。病児保育に関しては「医療的ケアを全面に出した場合、保育という観点からはなかなか満足に行くものがないのではないか」と考えていたのだが、今回の実習で「看護」「保育」の両面から補い合い利用者にとって十分な環境が整っていることを実感した。

クリニックでは外来実習と業務見学、訪問診療を行った。外来での高橋院長の「0歳から100歳まで」という一言に地域医療が凝縮していると考えられる。可能な限りゆったりと急かさず話したいことを出し切るようにじっくり耳を傾ける。そうして利用者に満足してもらうことも医師の役目なのだと思われ、外来の見学を通して切々と感じた。小児の診察を行った際、咽頭所見を取り辛いことを学んだ。大学病院の外来ではなかなか実習できない経験だった。そして、なにより両親の不安は、確かに我が子の体調にあるが、実はそのバックグラウンドに自分の仕事や家族からの支援の有無が大きく関わっており、家族全体をしっかりと支えることもクリニックの役目なのだと感じた。訪問診療では、認知症の方の診察を多数経験した。症状の訴えは少なく聞き取りには苦慮したが、院長から教わる「世間話の方法」を駆使して診察を行った。はじめはぎこちなかったが、次第に引き出しも増え、そうすることで診察相手の様々な情報に自分が立てたアンテナが反応する感覚を味わうことができた。

今回の実習を通して、「多職種連携」を言葉だけではなく実感できたのは大きな学びであると感じる。医師、看護師、事務員、保育士、介護師はそれぞれのフィールドで活躍しつつ、少しずつ「はみ出して」互いの業務を補い合い、互いの信頼関係のもとによりよい医療や福祉を提供する。ときに本人そしてその家族とも連携し、自宅で、地域で安心して生活できるのだと思う。「うりずん」の廊下に飾ってあった写真の笑顔が他でもない「ひばりクリニック」「うりずん」「かいつぶり」のすべてを語っていたのだと感じた。

改めまして、今回実習をさせていただきまして大変ありがとうございました。私自身医療福祉のボランティア経験が乏しく、今回の実習でほんとにたくさんの経験をさせていただきました。ときに失礼な事もあったかと思えます。大変失礼いたしました。朝の会でも少し話しましたが、今後、医師人生においてこんなにじっくり訪問診療や児童福祉の分野について学ぶ機会はないと考えています。学生のうちに経験できて良かったです。また、様々なイベントに参加する機会もあると思いますが、その際はどうぞよろしくお願いいたします。